

## 『ミニヤコンカ奇跡の生還』（松田宏也著）

昨年の図書紹介（2020年9月、第64号）で、『生と死のミニヤコンガ』（阿部幹雄著）を紹介したが、同じミニヤコンカではもう一人、別のパーティーでその翌年に奇跡の生還を果たした人物があり、この人の著書を抜きにしてミニヤコンカの生還劇を語ることはできない。世上では後者の方がよく知られている。

中国・四川省にある「魔性の棲む山」ミニヤコンカ 7556m からの満身創痍のこの壮絶な生還は前者の比ではなく、下山中に行方不明になったパートナーを“見捨て”ながら飲まず食わずで 19 日間彷徨の末、たまたま薬草を採りに氷河を登って来ていた現地の農民父子に発見・救助され九死に一生を得たものである。60kg あった体重が発見時には 30kg に減っていたというから、この彷徨が如何に苛烈なものであったか、想像を絶する。山岳遭難史上最も酷烈な生還であった。

今から約 40 年前、市川山岳会のミニヤコンカ遠征パーティーの一員として、心技体ともに気を許しあった岳友のもう一人の隊員と 2 人でザイルパーティーを組み、BC を出発して 40 日、吹き荒ぶ風雪の中で最後の登頂アタックを掛けたが頂上を目前にして荒天のために登頂を断念、下山途中にルートを見失い、おまけにテントやシュラフ・装備・食料も失い、BC 隊との唯一の連絡手段であったトランシーバーも凍結して故障、テントも無い食料も無い雪中ビバークを何日か繰り返した挙句、体力の弱ったパートナーがフラフラと脱落、本人にもパートナーを探す体力は既に無く、その後飲む水も食糧も無い 19 日間を独りでフラフラと彷徨い、最後の頃には極地仕様のダブルブーツも脱げてしまってそれを履き直す力も無く皮膚に貼りついた靴下だけの足になって、凍傷で役立たずになった手足では歩行できずに、氷河のモレーンの上を腹這いになってカエルの如く這って、1 日間にやっと数メートルしか進むことができなかつたというから、この逃避行が如何に過酷なものであったか、想像できよう。

パートナーを救出できず死に追いやった時、胃に穴が開いた激痛にのたうちながら、ひとり下山する自分を責めて、「ゴメン！、菅原、許してくれ！」と懸命に謝った心の内はいかばかりであったであろうか。著者自身も両手足を凍傷に冒され、収容された四川の病院で両手の指全てと、両足の脹脛から下を切断、重度の身体障害者になった。

19 日間もこのような窮地・重態に陥りながらも生還を果たしたのは、何としても生きて帰るという信念と、何があっても道は何とか開けるとい楽天性（良く言えばノウテンキ）の賜物でもあろうか。下山時の彷徨の折には四六時中幻覚に悩まされているが、見た幻覚が単なる幻覚ではなく、リアリティーに満ちた助かることに繋がる“楽しい”幻覚であったこともこの楽天性によるものであろう。

著者は、その後苦勞してリハビリに励み、両足とも義足を付けて社会活動にも復帰、登山にも復帰してシシャパンマ登山隊副隊長も務め 7430m の最終キャンプまで登った。また、現在も日本山岳会創立 120 周年記念事業「グレート・ヒマラヤ・トラバース」のメンバーとしてヒマラヤを往復されている。山の世界だけでなく、ビジネスの世界でも大企業の役員として活躍された。これはタダモノでは無い。

本書のエピローグ、「・・・人生は一編の詩。足よ、手よ、僕はまた登る」。

何としても登山に復帰したいという信念と熱情は、同名の著書『足よ手よ、僕はまた登る』（山溪ノンフィクション・ブックス、1984 年刊）に詳しい。著者のますますのご健闘を祈りたい。

山と溪谷社 1983 年刊（現在はヤマケイ文庫にあり、920 円）

（酎）

